

2006年5月11日 於：東京大学赤門総合研究棟 A200 講義室

第2回研究会

「フィンランドの読解教育」

北川 達夫(日本教育大学院大学)

第
I
部第
II
部

OECD/PISA2003の読解リテラシー1位の好成績をおさめたフィンランドの読解教育の特徴について、8年間の現地在住経験と、フィンランドの教科書の翻訳書「フィンランド国語教科書小学3年生 日本語翻訳版」,「フィンランド国語教科書小学4年生 日本語翻訳版」を参照しながら紹介した。教科書執筆者が学習指導要領作成するので、教科書に合わせて指導要領が変わること、読解素材は文字以外のvisual languageと呼ばれる絵、写真、漫画、広告、グラフなど多岐にわたること、フィンランド人の国民性は日本人に似ているが必要となれば論理的・批判的に意見を述べる論理展開力も持ち合わせていることなどは、日本の読解教育でも参考にすべき点があるだろう。

注記)本稿は、講演内容および事後の質疑応答を事務局が要約的にまとめたものである



はじめに

今日はフィンランドの読解力あるいは読解教育についてお話しします。皆さまもご存じの通り、現在日本でも「読解力」という言葉の定義について問題になっているかと思えます。そのきっかけといたしますが、OECDが実施した学習到達度調査PISAに、「読解リテラシー」があり、それが一体日本の「読解力」とどう違うのか、明らかに違うのだが、どこが違うのかという議論に起因いたします。今いろいろな自治体や学校単位で読解力向上プログラムを進めておりますが、「読解力」という定義自体が非常にはっきりしないというのが、現状であると思えます。まずは、フィンランドの読解力と読解教育はいかなるものなのかというお話から始めたいと思えます。

1 フィンランドの読解リテラシー

実はフィンランドにおいても、「読解力」という言葉については、かなり混乱がございます。フィンランドでPISAを実施するにあたり、「読解リテラシー」という区分もフィンランド語に訳されたのですが、そこで使った言葉が、「ルク・タイト」という言葉でした。日本語に翻訳しますと「ルク」は「読み」、そして「タイト」は「技術」です。「読みの技術」が、読解リテラシーの

翻訳として適当かどうか定かではありませんが、フィンランドの国語教育では一般的に使う言葉です。ただ、「ルク・タイト(読みの技術)」とはまさに読みの技術そのものであり、この言葉をフィンランドの教師、ごく普通の現場教師が聞いたときに、最初に思い浮かべるのは、「音読が上手にできるかどうか」、「すらすらと上手に読めるかどうか」ということです。どちらかという読み自体の技術を意味します。

読解リテラシーの翻訳としてこの「ルク・タイト」を充てたため、日本からフィンランドに調査に行くと、通訳が読解リテラシーを「ルク・タイト」と翻訳するので、質問された学校教師は、「お宅の学校では『ルク・タイト(読みの技術)』を上げる教育をどのようになさっていますか?」と解釈するのです。現場教師の大半はPISAのことなど大して知りませんので、「いや、毎日音読させています。」と答えます。そうして、フィンランドでは毎日の音読によって「読解リテラシー」を向上させているという誤解が生まれてしまうのです。

フィンランド語で読んで理解する能力というのは、*luetunymmärtäminen* と言います。「読んだことを理解する」という意味しかありません。「ルク・タイト(読みの技術)」の中には、「読んだことを理解する」ことも含まれる、とフィンランド語のいろいろな指導書には書かれています。この読んだことを理解する能力、つまりただの読解もこの言葉の中に含まれています。

とりたてて、PISAで言う「読解リテラシー」あるいは最近言われている「PISA型の読解力」に、ピタッとあてはまる概念はフィンランド語にも本来的には存在しないわけです。

2 フィンランド読解教育の特徴

次に、フィンランド読解教育の特徴についてお話しします。

2.1 国語教育の中核としての読解教育

～「読み」と「書き」がもつれあう活動～

フィンランドの読解教育は、国語教育の中核に位置づけられ、特に第3～5年生においては、書く・話す・聞くなどの技能も読解教育の一環として育成されています。ここで「読解教育」という言葉を用いた理由は、これがむしろフィンランドの読解力に寄った表現だからです。先ほども申し上げたようにフィンランドにはもともと「読む技術(ルク・タイト)」という言葉はありますが、国語教育で「読み」と「書き」を分けて考える概念自体がそれほどなかったのです。実際にフィンランドの国語の教科書の指導書に載っている事例で説明します。

「読む」にせよ「書く」にせよ、国語で扱う情報源は次の3つがあるとされています。外部の情報源、自分の知識、そして経験です。これらから情報を集め(集材し)、そこから情報を選別する(選材する)という作業をするわけです。集材と選材の作業をし、それを分析して、それに基づいて自分の考えをまとめる。そして、その考えを論証したり、他者の考えと比較しながら吟味したりし、最後に、何らかの形で発表する。これら一連の作業は、「読み」でも「書き」でも変わりません。つまり、この外部の情報源が主体となって、それを自分の知識や経験で補いながら、集材し選材する過程が「読解」です。また一方で、自分の知識や経験を中心に、例えば物を調べて何か書く、あるいは作文を書くことが主の活動で、分かりにくいことを調べるといようなことは従の活動になるときもあります。このようなとらえ方をするので、読みと書きとは根本的に同じ作業なのです。自分の考えを構築してそれを発表するまでの全過程が「読み」に含まれる理由は、読みと書きが一体化したフィンランドの国語の考え方だからなのです。

よって、特に小学校低学年の国語教育では、「読み」「書き」が充分にできるようになる前に、見たもの聞いたものを、とにかく言葉にするところから始めます。それは見たもの聞いたものが彼らの情報源だからです。やがて本がすらすらと読めるようになってきたら、本を読んで何でもいいからコメントを書く。コメントを書いたら、人に読んでもらう。読んだ人はまたそれについて書く。「書く」と「読む」がもつれ合いながら進むことによって、コミュニケーション能力を伸ばしていくことが国語教育の本質である、とフィンランドの国語の指導書には書かれています。

ですので、読解教育の主体というのは、どうしても国語の授業では書く時間よりも読んでいる時間の方が長く、書く場合でも何かを読んでからそれに基づいて書きます。外部情報源を元にして知識や経験を使って考えを作る。その考えを書くという作業が作文ですし、あるいはそれを口頭で発表する事が口頭表現であります。中核に読解があって、そこから派生的に口頭表現や作文が生まれてくるのです。

フィンランドで書く作文には2種類あります。1つはテキストの内容について書くこと、もう1つは、例えば遠足に行ったことなど自分の経験について書くことです。小学校段階では先生によって多少の違いはありますが、読んで書くという活動が基本になっています。

普通、読む、書く、あるいは話すというのは、読解教育を中心にして育成されるわけですが、そのほかフィンランドの読解教育の中で面白いのは「読書教育」です。ここにあるのは、フィンランドの4年生の教科書の一部ですが、本の表紙があってその横には簡単に要約した短文があります。この短い文章はヨーロッパの本の裏表紙に書いてある本の要約です。要約文を読解して問題にします。この話の展開を予想させ、「正答を知りたかったら、実際に本を読んでごらんさい」といって、その本を読ませようとしています。これは読書教育の活動ですが、読解の中で読書を奨励しよう、という考えに基づいて授業が実施されているのです。

2.2 読解素材が多岐にわたる

読解素材が多岐にわたることは、フィンランドを含み、世界の今の国語教育の全体的な流れだといえます。フィンランドもその流れに倣っていると聞いています。もともとフィンランドの国語の教科書では様々な素材

を扱っていたのですが、2004年の指導要領の改正以来、特にその傾向が強くなりました。多岐にわたるとは、文字・活字で印刷された素材、小説や随筆や説明文以外のものを多く取り入れていくということです。

具体的に、どういう素材が使われているのか、ニュージーランドの実例をあげたいと思います。ニュージーランドをとりあげた理由については、また後ほど細かく説明しますが、実はフィンランドの国語教育、特に読解教育のメソッドは、ニュージーランドの読解教育を参考にして作られた、と言われていました。特に参考しているのがNCEAといわれる、ニュージーランドの義務教育終了時に行われる国際教育テストのようなものです。そのテストの中で、レベル1は義務教育終了時、(11年生のとき、日本の高校1年生のとき)に受けるテストです。12年生のときはレベル2、13年生のときにはレベル3を受けて、その3つの成績で大学進学が決まるテストです。

◆漫画素材

ニュージーランドの義務教育終了時の一斉テストで使われる読解素材には、小説や詩もありますが、特徴的なのは漫画です。フィンランドでもこの方法を採用しています。ここに顔をしかめているお兄さんがいて、名前はA.J.です。A.J.は家族と一緒にピクニックに来たのだが、やる気が全くないのです。「ピクニックを楽しんでいないことが、漫画の絵のどこで分かるのか説明しなさい」というのが、設問1です。例えば、背後にいる家族と本人の色が違う、A.J.が顔をしかめている、あるいは本文中の表現「このつまらないピクニック」の“つまらない”の部分が大きな字で書いてあるから、などが想定される答えです。

設問2では、漫画のコマの順番を問うています。その順番が、どこで分かるか理由も述べなさい、というものです。答え方はいろいろあります。絵から判断する、吹き出しの内容から判断する、漫画の絵のスケートボードがダーっと流れているから、ということでも答えとして認められます。

この漫画は、A.J.は、ピクニックが楽しくなくて、しかも自分の友達が近くでスケートボードで遊んでいるのに、自分は家族と一緒にピクニックに来ていることが、十代の若者にとってはとってもカッコ悪いことで、友達に見つかったらまずいという顔をしています。そんな気分のところに、友だちのスケートボードが

A.J.の方に転がって来て、お父さんが乗ったら、すごくうまくて、最後には、お父さんとA.J.が和解するという内容が描かれています。最後の設問3は、漫画の最後の父と息子が和解するコマが何を意味するのか、を問う問題です。つまりティーンエイジャーとその家族の関係について、この漫画から分かることについて自分の意見を書きなさい、というのが設問です。

◆広告素材

別の素材例では、携帯電話の広告があります。設問1では、この広告を見て、ティーンエイジャーに一番訴えかけることを説明させます。例えば、兵士の頭の上に花が咲いていること、広告の色彩があざやかなこと、文字が多色刷りなので目をひくこと、などが解答例です。

最近、読解力の定義はさまざまになっています。PISAにグラフや図表を見て答えさせる設問があることから、読解力の定義に科目横断的な素材を使うことが言われ始めています。科目横断とはどういうことかが問題です。例えば、社会科で使うようなグラフや表を入れたり、あるいは理科の実験内容を入れてそれを読み解いたり、あるいは何かの説明書を読んでそのやり方の説明をするというのがあります。科目横断だからということで理科や社会の内容を入れて、国語の問題にすることでどれほどの意味があるのか、今は現場でも結構疑問視されています。理科のことは理科でやればいい、社会のことは社会でやればいい。知識がないのに、どうやって理科や社会の新しいことを国語の素材に使えるのか。それは確かにその通りです。では、今ご説明した漫画のようなビジュアルな素材は、何のために読解素材に入ってきたのでしょうか。科目横断という言葉は、フィンランドの学習指導要領の中にも書かれていますが、科目横断的な内容を学習することが目的ではないのです。

先ほど、読みと書きは情報源を元にして、そこから情報を取り出してくる活動であることをお話ししました。だとすれば「情報源は何でもいい」という考え方が1つあります。もう1つの考え方は、絵を用いる「visual language」という考え方です。つまり活字としての文字だけではなく、visualなlanguage、すなわち、視覚的な言語を読むことが目的なのです。visual languageの読解力の育成のために、多岐にわたる素材を使っているのです。

visual languageの読解力を育成する方法について、簡単に説明します。これはフィンランドの3年生の教科書で最初の単元で使う素材です。ここに挿絵があります。もちろんこの挿絵は本文の内容に対応しています。楽しむためにあるわけではありません。指導書によると、この教科書を扱う場合、本文を読む前にこの「絵を読まないといけない」と指示があります。つまり、生徒は徹底的にこの絵から気が付いたことを言うのです。赤い服を着て立っている女の人は先生だろうか、この子はたくさん鉛筆を持って喜んでいるけれども、多分学期初めで鉛筆を配ってもらって喜んでいるのだろうか、このあいさつをしている子はきっと新入生で、他の子をよく知らないからあいさつしているのだろうか、とか気が付いたことをどんどん言います。その後で、今度は先生が発問していきます。この中で先生はどの人だろうか？という問いに対して、黒板の前に立っているし大人の人だから、この人が先生だと思う、というように、絵を見てそこから情報をできるだけ引き出す作業をやります。答えは、本文に書いてありますから、すぐ答え合わせができます。もちろん「絵を読む」という作業が重要なのであって答えが合っているかどうかは重要なのではないのですが、まず絵から読むという作業は、本文を読む前に話を予測することができ、予測したことと本文との差を確認できます。ただそれだけのことを授業の度にやるのです。本文を読む前に、絵や写真を読むこと、これが第一段階のvisual languageの勉強です。

次の段階の勉強では、具体的に絵を読んでいきます。これはまだフィンランドでも使われていない新しい5年生の教科書です。単元名が「絵を読む」です。何をするかといいますと、バイキング時代、今から1000年くらい前のクサカリガマの遺跡から出土した現物の写真と、その図解が並んで掲載されていて、課題がついています。現物の写真と図解したものを見比べて、気が付いたことを言いなさい、というのが課題です。要するに、写真と図解では、目的に応じてどちらがわかりやすいか、短所長所を挙げる活動をします。

また、これは肖像画です。この人について調べる学習ではなく、この絵を見て想像したことを言う問題です。勝手に想像するのではなく、答えには必ず根拠があるのです。こういう服装だから金持ちそう、というような理由です。エジプトの壁画が読解素材だとしても、エジプトについての学習をする以前に、とにかく

絵を見て気が付いたことを列挙していく問題です。

こちらは、ヘルシンキ中央駅の写真です。100年前と現在の2つの写真が並んでいます。新旧を比べて、違う点、同じ点を見つけます。そして古い物と新しい物を並べてみることにどういう意味があるか、考えます。さらに、ヘルシンキ駅の部分の写真もあります。巨人像の写真、入り口のところを大きくした写真、駅の前に立っている人を写した写真があります。全体を写した写真と部分を写した写真を両方見て、互いの特徴を思いつく限り述べます。イラクでフセイン政権が倒れたときに、フセイン像を引き倒す映像で、フセイン像のところをアップで映し出すと、たくさんの人が喜びながら倒しているように見えるが、カメラを引いて撮るとまばらにしか人がいなかったということと同じです。写真でも、撮り方によって事実のとらえ方が大きく変わってくるということを勉強させるのです。また、科目横断という観点で、基本的な技術を学ぶために、まったくイデオロギーを感じさせないようなモデルを使って、物の見え方によってあるいは事実のとらえ方、切り方、取り方によって、どういうふうに事実がそこから引き出せるかということの違いを、勉強していくということもやります。5年生の学習内容です。

7年生の段階では、もう少し学習が深くなります。これはフィンランドでのお菓子の消費量を表したグラフです。グラフもvisual languageととらえます。まずこのグラフの内容を言葉だけで作文として表現させます。それからグラフから分かる内容について、自分の意見を書きます。

次は、芸術的な絵です。この芸術的な絵について下に2つの説明があります。1つ目の説明は、学校の食堂に飾る絵についての議論です。学校の食堂にはどんな絵を飾ると、雰囲気よく昼ご飯が食べられるかという話です。2つ目の説明は、この絵そのものの説明で、ライオンがいて馬がびっくりして止まっているというような内容です。1つの絵について2つの状況があるわけです。食堂に飾る絵についての話、絵の中で起きていることの話、これらを様々な方法で組み換えるのです。ものすごくロマンティックに書き換えなさいとか、ものすごく暴力的な感じで書き換えなさいという、絵を見ながら文をいろいろとパラフレーズしていく練習です。こういう段階的なvisual languageの読解練習を経て、先ほどお見せしたニュージーランドの事例のような、一連の問題を解けるようにしていくのです。

2.3 結果よりもプロセスを重視する

～「手本」と「型」を教える～

フィンランドの国語の授業を見てみると、先生は答えを最後まで言いません。とにかく子どもに考えさせていろいろな意見を出させて、これでもういい、というところで終りにします。答えを言わない理由にもいろいろあって、答えを先生が言ってしまうと、正解、不正解という話になり、読解教育の意味がなくなるといふこと。また、フィンランドの教育の基本には、考え方を教えるという思想があり、結果よりもプロセスを重視するということです。

教科書に対応した指導書はありますが、設問の考え方が載っているだけで解答はほとんど載っていません。生徒の答えに対する評価基準もまったく載っていません。それはすべて先生と生徒が、コミュニケーションの中で解決していくべきものだと考えているからです。この結果よりもプロセス重視という授業で、考え方を教えるのに「ただ考えなさい」というやり方ではありません。教科書を見てみると、いろいろ難しい問題も載っていますが、ただ考えると言われてもどこの国の子どもでも、困ってしまう。では、どのように考えるのでしょうか。フィンランドの国語教育で、考え方の指導方法として「マッリとユオニ(malli/juoni)」があります。マッリ(malli)は「手本」、ユオニ(juoni)は「型」です。まず、考え方の手本を先生が示します。あるいは素材文がその考え方の手本になっている場合もあります。その手本に従って考えるのです。次に、型とは、決まった型があるのではなく、こういう道筋で考えなさいということ、先生が生徒に対して臨機応変に作っていくのです。型通りに考えていけば、最終的には自ずと解決に結び付くような型を与えます。このように手本と型の中で、ものの考え方を指導することが特徴です。

2.4 班活動を主体とする授業展開

非常に難しい問題を考えるときに、先生が手本を示して、考え方の道筋を示したとしても、それを子どもが一人でやるのは難しいです。そこで、先生が授業でやり方を説明し、手本を見せて型を説明する。そのやり方を班活動で相談しながら進めるのです。これは国語教育に限らず、フィンランドでは一般に行われています。班とは、日本と同様のもので、大体4人か5人で構成されます。それでできるようになったら、日本

でいうところのペア学習、つまり2人一組で活動します。相談相手を減らすのです。そして、最終的には一人でできるようにするのが目標になります。班活動を主体とする授業展開は、結果よりもプロセスを重視する教育を効果的に進めるための方策、といえます。

班活動を始めた経緯をフィンランドの先生にたずねたら、イギリスの方法を参考にした、と言いました。そのイギリスは、1970年代から80年代ぐらいにかけて、日本の班活動を参考にしたとのこと。結局、班活動の起源は日本のようなのです。しかし、このフィンランドの班活動による指導方法を日本の先生に説明したら、このやり方では教科書を進められないと言われてしまいました。なんとも皮肉な結果です。

3 フィンランド読解教育の到達目標

3.1 伝統的区分

それでは、フィンランドの読解教育の具体的な内容について話します。フィンランドの読解教育には到達目標があり、伝統的区分には、3つの目標があります。1つ目が「復唱読解(toistava lukeminen)」で、文中の情報をそのまま取り出すことができるレベルと定義されます。つまり、登場人物は誰か、登場人物はどこにいるのか、いつどこで何をしたのかという質問に答えられることが、復唱読解のレベルです。

2つ目は「推論読解(päättelevä lukeminen)」です。文中に示された結論、あるいは当然の結論を、文中より証拠となる情報を取り出して論証することができるレベルと定義されています。「なぜ」に答えられるレベルです。なぜ主人公はそれをしたのか、また、それをした結果について、理由を文中から探して探ることができるレベルです。

最後の、3つ目は、「評価読解(arvioiva lukeminen)」です。文中の情報と自分の知識や経験と結びつけて、新たな結論を導き出すことができるレベルです。分かりやすく言いますと、文章を読んでそれについて自分の意見を書く、あるいは物語であればその物語の続きを考える、といったことがこの読解のレベルになります。

3つを並べると、1番目が一番簡単で、3番目が一番難しいようにみえるのですが、問題例を見ると、必ずしもそうではありません。フィンランドでは三年生から本格的な読解教育を始めますが、これら3つの目標

を段階的に習得していくのではなく、三年生の段階から全てが求められます。読んで自分の意見を書く、あるいは物語の続きを考えるという3つ目の評価読解のレベルまで、求められるのです。教科書の発問やテストの発問をこの3つに分類することも不可能ではありませんが、完全に区分するのは難しいです。また、伝統的区分や他の何かに現場教師が縛られているわけではありません。最近の現場での区分は、非常にすっきりしています。

3.2 最近の現場での区分

1つ目は、「発見 (löytö) の段階」です。例えば、何か問われたときに、素材文や挿絵に明らかに情報が含まれていて、答えをそこから発見できるというレベルです。そして、2つ目は、「創意 (keksintö) の段階」で、発見したものを使って自分の意見を言ったり、あるいは反論や反対意見を述べたりできるレベルです。つまり、素材文から探し出すレベルと探し出したものを使って何か新しいものを作りだせるレベルという、ごく単純な2つのレベルが現在の現場での区分です。この場合、レベル1と2とでは、明らかに2の方が難しくなります。つまり、レベル2の前提として1が必要になるのです。即ち、「発見は創意のヒントとなるものでなければならない」ということが非常に重要です。

4 発見から創意への流れ

情報の取り出しというと、問題のための問題が世の中には多数あります。何でもいからとにかく情報を取り出して、取り出した情報が後につながらないような問題です。目的がなければ、情報を取り出す意味はありません。情報を取り出したら、そこから、次の創意につながるような問題でなければならないということです。「発見の段階」から「創意の段階」へのつながりが大切なのです。

4.1 発問のパターン

理想的な発問のパターンをご紹介します。私がフィンランドの国語の教科書やテスト問題の作り方を勉強しているときに、フィンランドの先生たちに、基となる理論を聞いたところ、ニュージーランドの方法を勉強しなさい、と言われました。これからお話しする発問のパターンは、フィンランドにも当てはまるもので

すが、基本的な理屈はニュージーランドのNCEAの発問のパターンを分析したものです。

◆重要な人物／設定／場所／時期／変化／事件に関する情報の取り出し

「重要な人物／設定／場所／時期／変化／事件を挙げなさい」というパターンです。これらを答えさせて、その答えが創意につながる発問です。なぜ人物とか設定とか場所が重要なのか、そのなぜにつながっていく発問です。なぜ重要なのか、何を根拠に重要と判断したのか、さらに先につなげて、その重要な人物というのは、いかなる変化に関わってくるのかというように、さらに話を深めていくことができます。

◆登場人物はどのような問題に直面したか

登場人物が直面した問題について情報を取り出し、その問題をどうやって解決したか、その解決方法についてどう思うか、解決した登場人物についてどう思うか、というように創意のレベルへと問題を進めていくパターンです。

◆重要な言葉／表現を挙げなさい

重要な言葉で表現を挙げさせるパターンです。表現を挙げるだけではなく、それがなぜ重要なのか、作者はなぜその言葉や表現を用いたのか、どういう効果があるのか、ということまで考えさせます。

◆印象に残ったことを挙げなさい

テキスト（この場合は説明文などが多い）を読んで、印象に残ったこと／びっくりしたこと／疑問に思うことなどを挙げるパターンです。なぜ印象に残ったのか、びっくりしたのか、疑問に思ったのかを説明する。疑問に思ったなら、その解決策まで考えさせます。

◆作者の最も言いたいことを挙げなさい

作者の最も言いたいこと、あるいはこのテキストから学び取れる教訓などは何かを問うパターンです。これだけなら主題を問う解釈とも言えます。その次の段階として、解釈の結果、それはなぜ一番言いたいことなのか、なぜテキストから学び取れることといえるのか説明する、というふうに創意の段階につながります。PISAの能力区分に、「情報の取り出し」「解釈」「熟考・評価」がありますが、発問というのは、発見から

創意まで一連の流れの中でできていなければならないのです。発問パターンは、もっと詳しく分析するとあと4つぐらいあるのですが、とりあえず5つ例示いたしました。

4.2 創意の段階

発見の段階から創意の段階まで発展的に考察できるようになるには、段階的に力をつけていかなければならないことがおわかりいただけたと思います。ここで、創意の段階の例を2つご紹介します。

◆物語の登場人物の行動を評価する場合

物語の登場人物の行動を評価するには、4つの問いかけがあります。

- 1) 自分が登場人物だったらどうするか
- 2) 登場人物に聞きたいこと/教えてあげたいことは何か
- 3) 登場人物の行動は適切か否か
- 4) 登場人物はどのように行動すべきだったと思うか

1)は、フィンランドの3年生が最初にやることです。自分が登場人物だったらどうするか、話の中に自分が入り込んで、主観的な視点から行動というものを批判的に解釈します。2)では、登場人物に自分になりきるのではなく、物語の中に自分が入り、客観的な視点で見るということです。3)では、自分は完全に物語の外に出ます。登場人物の行動は適切か否か客観的にした視点で考えます。そして最終的に、4)の段階に進みます。

◆説明文の場合

- 1) テキストを段落ごとに/全文を要約する
- 2) テキストに示された情報が答えになるような質問を考える
- 3) テキストに示されていない情報/項目に関わる質問を考える
- 4) 2)の質問の答えとなる文/段落を書く

説明文の場合ですと、上の4つの問いかけがあります。1)は、解釈のレベルになります。2)は、答えが必ず説明文の中にあるような問いかけです。3)では、テキストに示されていない情報や項目に関わる質問を考えます。4)で、最後にその答えとなるような文や段落を書くのです。物語文の4)や説明文の4)は非常

に難しいのですが、対面授業では三年生の段階からここまでやります。ただ、フィンランドの場合、テストと実際の授業で目標設定に非常に大きな差があるために、最終的な成績評価はテストと授業の総合で判断されます。

5 成績評価の方法と特色

成績は4～10の7段階で評価します。「8」がそれぞれの学年で設定された達成の基準点です。建前では、児童生徒が個々に目標を設定し、学期の始めに先生と保護者と児童生徒の三者面談をして、個々に設定した目標の達成度合いで評価します。しかし実際には授業内容自体がそんなに多岐にわたるわけではないので、個別に細かく達成目標が異なるわけではありません。

また、「8」という基準点が非常に重要です。中学校終了段階で、上の高校に進学するのか、それとも職業訓練校に進むのか判断をする場合に、全教科の平均点が8を超えていないと一般的には高校に進めません。つまり全員が到達すべき目標を達成しないと、高校には基本的に進めないものですから、その1個手前の「7」にどうも個別目標の設定をしているようなのです。「7」が個別に設定した目標達成レベルで、全員が達成すべき目標レベルが「8」というのが現実です。個別目標が建前であることは、フィンランドの先生たちも、あまり言いたくないようです。私は、学校を訪問すると必ず闇魔帳を見せていただくのですが、7と8の評価が一番多い。高校に行く適性があるかないかという点で分けていて、9や10、あるいは6や5というのは非常に少ないです。相対評価ではないのですが、これが実態のようです。

成績評価のためのテストは学校や先生によって大きく異なりますが、一般的には一学期の終わり、クリスマス前、春学期の終わり(5月の最終週と6月の第一週ぐらい)に行います。

6 読解力評価の特色

読解力評価について、一般的な特色をご紹介します。

6.1 学習プロセス全体の評価

読解力の評価はどうすべきか、指導書には、「学習

プロセス全体を評価すべき」と書かれています。読解力に限らず国語とは単純な暗記や訓練だけで伸びる教科ではありませんので、学習プロセス全体を評価すべきであると言っているのです。したがって、国語の場合、成績が悪いのは書けなかっただけなのか、それとも口頭で言うことはできるが書けなかっただけなのかを判断するために、読解テストの後に面接を行うことが多いです。本当に分かっていなかったのかどうか、筆記テストだけでは分からないということです。

先ほど言いましたように、授業で求める到達目標とテストで求める到達目標には、大きな違いがあります。例えば、創意の段階の1)で、物語の登場人物の行動を評価する場合、三年生であっても授業では4)の非常に客観的な視点での評価を求めているのですが、テストでは1)が到達目標になるかならないか、という程度です。実際この1)のレベルの問題がテストに出てくるのはせいぜい四年生ぐらいから、2)が出てくるのは五年生ぐらいから、そして3)、4)になると、中学生ぐらいにならなければテストで求められることはありません。これは説明文の場合も同じです。

このように、授業で求めている到達目標とテストで求めるそれとの間に開きがあるために、単独作業のテストだけでの判断が難しく、いわゆる平常点の割合が非常に大きくなっている、というのが国語、特に読解の場合の特色です。ただ、そうしますとテストの目標設定がどうしても低くなりがちですので、テストでは余力問題(lisätehtäva)を設定したり、選択問題で選択肢以外の記述解答を認めて、答えが適切ならば、さらにプラス点を与えたりといったことをしています。結果的に、満点以上の解答が可能になるようなテストも多く、一つの特徴といえます。余力問題、基準よりもプラス、満点よりもプラス、といった発想はフィンランドには昔からあるようです。今から15年前に、日本を題材にした作文コンクールを行ったことがあります。私も審査員でしたが、フィンランドのいろいろな国語の先生や作家に評価していただいたときに、とりあえず基準を決めてそれに従って採点していきました。例えば誤字が多いとか言っていることが分からないとか、そういう基準に従って、10点満点で点数を付けます。次にプラス点というのをどんどん付け加えていきます。そうすると、10点満点のはずだったのに27点とか35点とかが出てきます。日本人から見ると非常に妙な採点システムなのですが、どんどんプラ

スしていくという考え方が、特に作文の評価にはごく一般的にあるそうです。

6.2 具体事例

説明だけではわかりにくいと思われましたので、資料1に、第四学年の学年末試験の実例を挙げましたのでご覧ください。冒頭に、「区分：初めて読む素材文」と書いてあります。これは日本でもそうなのですが、国語のテストの素材文については、初めて読む素材文と、授業で扱った素材文の二通りがあります。このテストは、初めて読む素材文で、内容は「クジラについての説明文」です。24点満点です。

(資料1)

(資料)
●第四学年学年末試験実例 (区分：初めて読む素材文—クジラについての説明文)
(24点満点)

- この文章全体のタイトルを考えて、文中に書きこみなさい。(配点2)
- 各段落の見出しを次から選び、文中に書きこみなさい。(配点5)
協力しあうクジラ 喜びのジャンプ 半年分の食事
1時間に2キロずつ体重増加 海中のコンサート
- 次の書き出しに続くように、クジラについての事実を書きなさい。(配点6)
 - クジラが持っているのは ()
 - クジラがしないのは ()
 - クジラができるのは ()
- 次のことらについてのみ、短い文章を書きなさい。(配点9)
「クジラの外見と声」
- クジラについて、あなたがいちばんびっくりしたことは何ですか。解答用紙の裏に書きなさい。びっくりした理由も書きなさい。(配点2)

(資料2)

●採点基準

- テキストの全体的な内容を理解しているかどうか分かる。クジラの限定的な側面についてのタイトルには、点数を与えない。
- 結論読解の小問。各1点
- テキストから情報を選別して抜き出せるかどうか分かる。さまざまな解答が可能。各2点。
ただし、文中に挙げられている事実であっても、具体性が欠き、重要ではない瑣末なものを挙げた場合は1点を与える。
例：「(クジラが持っているのは) 大きな心臓です。」
中心的で重要な事実を挙げた場合は2点を与える。
例：「(クジラが持っているのは) 歌うことによってメッセージを伝える特別な方法です。」
- このテストの最も重要な問題。テキストから情報を取り出し、それらを結びつけ、論理的に文章を構築しなければならない。
文中に書かれている事実、あるいは事実から当然に推論されることのみ点数を与える。
ただし、事実を書き抜くのではなく、自分の言葉で書かなければならない。

(5 余力問題：lisätehtäva) *注：採点基準等について記載なし。

問題1は、クジラについての説明文ですから、要はクジラと書いてあればいいのだらうと思いますが、採点基準(資料2)を見ますと、テキストの全体的な内容を理解しているかどうかを判定するための問題だと書かれています。クジラの限定的な側面、例えばクジラの大きさとかクジラの泣き声とかでは点数がもらえません。

問題2には5つの選択肢が挙げられています。採点

基準は、結論読解の小問、各1点とあっさり書かれています。マルかバツかです。ここでは指定がありませんが、選択肢以外の解答を自分で書いてもいいことになっており、選択肢に縛られないのが一般的です。

問題3は非常に特徴的な問題で、情報の取り出しなのですが、対象となる情報が実に大量にあり、いろいろな解答があり得るわけです。類似した3問a, b, cがあります。採点基準の3番をご覧ください。テキストから情報を選別して抜き出せるかが分かる。さまざまな解答が可能。各2点。とありますが、情報の取り出しであるにもかかわらず、これは二段階の評価になっています。例も含めれば三段階の評価です。注釈として、ただし、文中に挙げられている事実であっても、具体性を欠き、重要ではない瑣末なものを挙げた場合は、2点満点ではなく1点を与える、とあります。例として、「(クジラが持っているのは)大きな心臓です。」大きな心臓を持っているとは、文中に書かれていますから、間違いではありません。では、なぜ減点されるのか、という点、先ほどお話しした発問の仕組みと大きく関わっているのです。つまり文に示されているような重要なアイデアや、あるいは全体的なテーマに関わらないような情報の取り出しは、あまり意味がないという考え方なのです。大きな心臓を持っていることは、文中に書いてあるのに、なぜ不適當なのかフィンランドの先生にたずねてみましたら、要するに大きな心臓を持っているというなら、何と比べて大きいのかを書かなければ、さっぱり分からないということです。この文章の中にはクジラは大きな心臓を持っていて、心臓の中で大人の人間が立っていられるほど大きい。そしてクジラの大動脈は子どもがはって歩けるほど大きいと書いてあるので、比較の基準を示さずにただ大きいとただだけでは、取り出した情報としての価値はほとんどない、というのです。4年生の問題で、大きさの比較基準まで考えるのは、なかなか難しいと思います。情報の取り出しだから簡単ということではなく、非常に批判的な思考力に基づいて情報の選別をしないといけません。採点基準にありますように、中心的で重要な事実を挙げた場合には2点、満点を与える。「(クジラが持っているのは)歌うことによってメッセージを伝える特別な方法です。」クジラの歌というのがあって、それでいろいろコミュニケーションを図っている説明があるので、そのような具体的な情報を挙げていけば点数は与えられるけれど

も、具体性を欠く場合には1点減点になるのです。これが中学生になってくると具体性を欠いた場合は0点になってしまいます。四年生なので採点基準はまだ甘いですね。

問題4番は短い文という解答指定の割に解答欄は広いです。書き方は自由です。採点基準には、このテストの最も重要な問題だと書かれています。テキストから情報を取り出し、それらを結びつけ、論理的に文章を構築しなければならない。文中に書かれている事実、あるいは事実から当然に推論されることのみ点数を与える。ただし、ここが重要なところですが、事実を書き抜くのではなく、必ず自分の言葉で書かなくてはいけないということが、ポイントです。

この問題を作った人に、細かい採点方法を聞きました。すると、この文章からクジラの外見と声に関することは、大体2つずつぐらい抜き出せるはずなので、それぞれについてちゃんと抜き出していけば、2点ずつ与えて合計8点。そして全体のできがどうであるか、論理的につながっているかという全体に対する点数として1点ということで、合計9点というふうに考えるのだそうです。できがものすごくいい場合はプラス2にして10点にすることもあるそうです。このあたりの発想は分かりにくいですね。

問題5は、フィンランドの特徴的な問題パターンのひとつで、「解答用紙の裏に書きなさい」というのは、基本的に余力問題です。裏の余白に書きなさいという指示はいいのですが、配点はたったの2点です。採点基準等については記載がないのですが、これをやるかやらないかと、そしてやったらきちんとできるかできないかというのが、成績「8」を超える評価の判断基準になってくるわけです。つまり4番の問題までが全員の達成目標ですが、5番はできる子がやればよいという問題です。この例のように2点の配点が記載されているのは珍しく、普通は配点されません。裏に書きなさいという指示だけのことが多いです。フィンランドでは、意見を言ったら、「理由を書きなさい」と先生が問いかけます。フィンランド語の動詞で「ペルステッラ (perustella)」という言葉があります。何かについて意見を書きなさいというときには、必ずこの動詞を使います。理由を言えという意味なのですが、本来的にはその何かを基礎づける、基礎を築くというような意味合いがあり、意見を言ったら必ずペルステッラを作らなくてはならないのです。フィンランドの国語教育ではおそらく一

番多く使われる言葉です。この余力問題では必ずと言っていいほど、自分の意見を書く形式になっています。意見を書いた場合のペルステッラは、授業では最低でも3つ理由を挙げるように言われます。3つできて正答なのですが、テストでは1つ挙げられれば良いと、そして2つ以上挙げられた場合は、そのたびにプラス点が付く評価になります。

質疑応答

期末試験の問題は統一で複数の学校が実施しているのでしょうか？

北川：フィンランドの場合は教科書も含めて国家あるいは自治体といった公権力が何かを統括することは一切なく、期末試験は教科書会社で作ったものです。ある教科書を使っている学校では、基本的にそれと同じ出版社が作るテストを使います。

教科書は学区レベルで統一ではなく、学校や先生のレベルで自由採択するのでしょうか。

北川：建前では先生が選べることになっています。しかし実際には学校ごとの教育方針とか、あるいは今一番厳しいのは予算枠があって、フィンランドでは本来生徒に全部教科書を買ってあげるというのが、原則になっているのですが、実情はほとんど貸与です。毎回回収しては、破損の多い場合にはその生徒の親に弁償させるという形です。ご存じのようにヨーロッパの国では今は付与のほうが多いのですが、フィンランドの場合、ノートや鉛筆は学校支給なのに教科書を付与できないことを先生たちが非常に悲しんでいます。お金がいくらでも使えれば、まずとにかく生徒に教科書を買ってあげたいというのが本音のようです。

ご紹介のあったニュージーランドのNCEAは義務教育終了時に全員が受けるものでしょうか。テストは当然評価基準に基づいて採点されると思うのですが、採点基準や採点体制をもしご存じであれば教えてください。

北川：ニュージーランドから帰国したばかりで、そこまではわかっていません。制度面についても調査中です。ニュージーランドの人口は430万人でフィンランドより80万人から90万人少ない程度ですね。羊は4000万匹だそうですが(笑)。

ではNCEAの内容面について伺います。全米学力調査(NAEP)などいろいろなテストがありますが、先生の所感としてNCEAの特徴的なところをお聞かせください。特にフィンランドがそれをお手本にしたのなら、あるいはフィンランドにとって合っているということなら、その合致した特徴や、ほかと比べて優れていると感じられる点について、ご感想レベルでも結構なので教えていただければと思います。

北川：はい。まずNAEPとの比較で申し上げます。NAEPの分析をしておりますと採点基準が詳細で、統一的であることに非常に感心します。ニュージーランドのNCEAを見たときに一番感心したのは、発見から創意の流れで情報を取り出させて、それに基づいていろいろ解説させて最終的に自分の意見を書かせるという、その理屈が非常に明確な点でした。その発問のロジックが全て、過去問題集に示されています。まずこれを聞いてその次にそれに関連してこれを聞いて、最終的にこういう意見を書かせる、というように、発問基準がはっきりしている。逆に採点基準ははっきりしないのですが、レベル別の表記はあります。直訳しますとまず一番低いAというレベルをやるには理解(understanding)を示すこと。その次がなかなか納得できる理解(creative understanding)を示していると。一番いいのはパーフェクティブなアンダースタディング。ここら辺になると、どのように日本語に翻訳していいかわからないのですが、分かっている、結構分かっている、よく分かっているという感じの基準が書いてあって、これではどうしようもないという感じなのですが。その点は、おそらく現場ではもっと詳細なループリックに変わるのだと思います。少なくとも公開されているものに関しては、発問の基準が非常にはっきりしています。本書の発問は、ご参考になるのではないのでしょうか。

読解教育の方針は明らかに日本のものと違うと感ぜられますが、こうした方針は、どういったバックグラウンドの人たちが提案するのですか。

北川：それは非常に特徴的な部分ですので、重要なポイントだと思います。読解教育の方針あるいはやり方、メソッドも含めて、フィンランドで最も進んでいることをやっているのは常に現場です。現場の先生たちはいろいろな国の先生たちとも交流したり、あるいはいろいろな国のリーディングの学会などに参加して、常に自分を高めていったりという努力をしています。それがどういう形で、こういう国全体の方針に反映されてくるかということなのですが、日本と大きく制度が違うために、読解教育の内容は非常に早いテンポで変化していくのです。日本との違いをまず教科書について言いますと、フィンランドには検定制度がありません。もちろん学習指導要領はありますが、指導要領を書いている人は基本的に教科書執筆者と同じ人です。そしてそれは、例えば教育の偉い学者ではなく、みんな現場の先生たちなのです。国語教師の横断的な団体であるフィンランド国語教師連盟というのがあり、いろいろな個々の先生が集めてきた先進的なメソッドや実践例が、すべて国語教師連盟を通じてまとまってきます。その国語教師連盟のリーダー的立場にある先生が、大体教科書執筆者なので、先進的なメソッドを教科書に盛り込んだり、全員で共有したりするのが好きなのです。教科書が指導要領より先に変わります。実践を積み重ねていって有効性が実証されると、教科書執筆者が教科書の内容を変えてしまうわけです。そうすると指導要領とのずれが出ますから、同じ人が、指導要領も書き替えるのです。つまり教科書が変わると指導要領が変わるといって、日本とは逆の現象が起きます。別にフィンランドの読解教育とか、あるいはニュージーランドの読解教育の典型はないのですが、世界の様々な国語教育が変化していく背景には、常に現場から変化してその現場の変化を教科書執筆者が受け止めて、教科書を変化させてその圧力で指導要領が変化していくのです。

そうすると全国テストで学力低下が指摘された場合、責任者は誰になるのですか。

北川：教育が失敗したということになると、一義的に責任を負うのはもちろんフィンランド教育省であり、実務を行っている国家教育委員会になると思います。しかし、そうした統一的なテストが国内にまずないのです。唯一あるのは高校終了時に受ける大学入学資格試験的なものだけです。勿論国際テストを受けて結果の責任を負うのは教育省だと思いますが、そういう議論自体、私が在任していた時も含めてあまり聞いたことはないです。

手本を先生が示して、型を教えるというステップを踏んで考える方法を指導するとき、班活動、ペア活動、一人というように段階を追うという話がありました。読解のときの班活動のイメージがわからないのですが、教えていただけませんか。

北川：はい。班活動には2つの形態があって、1つは全員で話し合っ、全員一つの答えを出していくパターン。例えば、教科書の発問に対する答えといっても、全員で一つの答えを出していくパターンというのがあります。小学生がやる場合が多いです。しかし中学生くらいになってきますとちょっとやり方が変わってきて、全員で相談はしますが、答えは一人一人が書くというパターンになります。つまり相談するだけです。あまりできのよろしくない子はできる子の解答を写すと。それでもいいというやり方でやっているのが普通です。

ペア活動は小学校ではやらずに、中学校でやるのですか。

北川：いえ、ペア活動は小学校でもやります。この教科書にもいろいろな発問があって、小学生の場合は問題ごとに、班で行う・ペアで行う、と細かく規定されています。指導書に絶対従うこと、という義務はもちろんありませんが、それだけの効果を考えて作られています。日本で班活動が機能するかしないかという場合に、常に問

題になるのですが、話し合うために班活動をするのか、それともちゃんと問題解決をする目的のために話し合いをするのか、という点です。話し合い自体が目的なのかそれとも問題解決が目的なのかという問題に非常に関係しています。これらをうまく使い分けているのが実際です。

新しいPISA型読解力の学習は、お話にあった伝統的ないわゆる古いタイプの読解力の概念からいうと、やはり非常に優れているという結論なのでしょうか？ visual languageのような概念を取り入れた読解力教育が、実は古い体質の概念からいっても優れているといえるのでしょうか。

北川：優れているという確信を持っていることは間違いないと思います。フィンランドがPISAの成績が高かったことをかなり宣伝している部分もありますが、フィンランド国内では、現場を含めてあまりPISAにはとらわれていないという印象があります。読解自体に対するこだわりはそれほどありません。つまり読解を通じて最終的に何をするための力かという点はとても現実的に考えていて、ある情報源があってそこから必要な情報を取り出す、それを選別する。そしてそれをうまくプロセスして、自分から新たな情報を発進していくという、コミュニケーション能力を育てる一つとして、この読解教育が位置付けられていると思います。

なぜ、フィンランドはニュージーランドのプログラムを参考にするようになったのでしょうか。かなりの試行錯誤や情報収集を経て、たどりついたのでしょうか。

北川：ニュージーランド式に決まるまで、実際、今の教育改革は1960年代ぐらいから始まって、なかでも内容の改革自体は70年代ぐらいから始まりました。フィンランドはニュージーランドとアメリカを参考にしています。その2つに落ち着くまで、ある教科書の著者の先生が世界中の教科書を何千冊も集めて研究した結果、ニュージーランドとアメリカの法則が一番強いという結論に達しました。そうして今から12年前

1993年に検定制度が廃止され、そこから完全に自由にニュージーランドとアメリカのメソッドを生かした教科書を作るようになった、という経緯があります。

visual languageは、どんなものが選ばれる傾向にあるのか、また発達段階との関係性などで選ばれるものの基準が変わるようなことがあるのか、教えてください。例えば、今回は漫画と広告のご紹介でしたが、PISAでも病院やインフルエンザが素材になっている、といったことです。

北川：このvisual languageははっきりした基準があります。基本的には文字以外のもので目で見て判断できるもの、あるいは影響を与えられるものということになっています。発達段階との関係では、フィンランドの高校は非常に厳格で、文と関係のある絵から始めてその絵の内容から推論します。絵は文字ではありませんから、あくまでも手掛かりを求めて推論せざるを得ないわけです。結果は絶対的ではありませんが、テキストと関連させた絵であれば、推論した内容が検証可能になるのです。

伝統的区分と最近の現場での区分について、お伺いします。伝統的区分の3番の評価読解と、最近の現場での区分の2番の創意の段階との違いを教えてください。

北川：これは日本の国語の問題を考えると結構分かりやすい分け方です。例えば解釈に関わるようなところで、フィンランドでも実際には国語で選択肢を選ばせる解釈の問題が存在しています。その場合は発見とか創意という分け方と、中から何かを、そのヒントキーで創意をしているといった扱いになるのです。つまり、発見と創意の2つに分ける理由は、推論読解を細かく分けるときに、単に言っていることを追うだけで結論が導けるものと、実際に解釈しないと結論が導けないものとの2つがあるからです。先ほど、推論読解は「なぜ」に答えられる発問と言いましたが、例えば日本では「なぜ～したのですか」という問いに、そのまま「～だから」と抜き書きで解答できる問題がありますよ

ね。その一方で「なぜ」という問いに、至るところから手掛かりを探し出して答えを作っていないかなければならないものもある。推論読解といわれているものでも、情報の取り出しと殆ど同じようなものもあれば、いろいろ帰納的に推論していかなければならない問題もある。そういう点で、3つに分ける意味がなくなってきた、と指導書などには書かれております。この3つの分け方も分かりにくいのですが、とにかく手掛かりをつかませて、自分で新たに書いていかなければいけない。全部創意であるとしたのが、伝統的区分から現場での区分への変化です。生徒のレベルからすると、この2つのほうがレベルで分けやすいのです。発見するまでは得意だけれども創意はできないとか。生徒のランクがこの2つで奇麗に分かれるので、今はこれを使っているということです。

成績評価に関して、児童・生徒が個々に目標を設定し、個別評価が建前だということは、評価以外の部分とも個別的で自由だということで、非常に合致しているように思います。一方で、7段階で評価して「8」が到達目標達成の基準点となる。ここだけは、その後の進路を左右するという点で、少し競走的な面も入ってくるのかどうかについてお聞きしたいのと、それと今の個別評価は、これから学ぼうとする内容についてはどうすれば可能になるのか、教えてください。

北川：最初のご質問ですけれども、8が到達目標達成の基準点であることは、フィンランドの学習指導要領などに示されて、まさに公的な立場の8を基準点として目標を設定していくということからきているものです。ですから、この8点が取れていれば、少なくとも非常に曖昧ではありますが、指導要領にしたためられた到達目標を達成したということになります。ただ現実にはフィンランドの場合、指導要領の到達目標は学年ごとに定められているのではなく、例えば国語であれば、1～2年、3～5年、6～9年と非常に幅のある学年帯に設定されているものですから、個々の細かい目標設定は教材が担います。ですので、学習指導要領に定められた到達目標を策定したのが「8」基準。これはあくまでも

建前なのですが、その値の策定上は、かなり幅があることになってきますので、そこに現場の裁量が入ってきます。あるいは個別にこの1年間での達成目標を設定していくことが必要になるのです。つまり3年生から5年生の間に達成しなくてはいけないことを、子どもによっては3年生のうちに達成してしまうかもしれないし、子どもによっては5年生までかかって達成するかもしれません。早い遅いは当然ありますので、その段階を到達目標達成の8と、それから3年間で最終的に達成できるかっていうこと。そしてその途中でどの段階で切っていくかっていうことを、個別評価の基準にしていくわけですね。ちょっと分かりにくいでしょうか。それで個別に設定して7点だと高校に行けない、8点以上だと高校に行ける、ということで、確かにこれは進路にかなり作用するものではあります。ただその場合に7点を取った子が高校に行きたいとすると、8点を取らないといけないのですが、そここのところで途中で散々先生と生徒が面談を繰り返して、例えば学習に対する意欲から始めて、それで個々の目標に対する例えば意欲など、さまざまな項目を作って勉強をします。7点か8点かが進学に一番かかわってくるのは、勿論中学の終わりです。その段階になると同時に、進路に対する考え方が出てきます。言葉の問題ではありますが、ここ、日本とは学力観が大いに違う部分があります。学力を、能力適性のような感じでとらえる部分があり、成績が悪いから職業学校にしか行けないという発想ではありません。ですからもちろん8点以上取っても職業学校へ進学する子どももいます。進路を考える過程で、今7点しか取れていない現状からすると能力適性がどこに向いているか、ということ、中学校に入ったあたりから考えていくのです。機械的に7点だから「はい、あなたはそこの学校で」8点以上だから「あなたはここで」という指導法ではありません。職業訓練校に進んだら、大学に行けないわけではありません。高校卒業の資格試験で復活して、進路を変えることが可能です。ただ、職業学校に進学した場合は、総合大学ではなくていわゆるポリテクに進むのが普通です。

評価はいろいろあるはずなのに、最後は科目ごとの成績を平均して8.0を超えているかどうかと考える点が、これまで抱いていたフィンランドの特徴から見ると、異質な感じがしました。

北川：8を取る基準自体が指導要領に示されてはいますが、その基準は決して高くありません。先ほど、テストでの基準と、実際の授業での基準は違うことをご説明しましたが、そもそも8の基準自体がそれほど高くないのです。

フィンランドが読解教育をした結果、たまたまPISAの読解リテラシーの結果が良かったというお話でした。フィンランドの読解教育は、そもそもアセスメントありきで現場の教育をしているのか、それとも何かしら教育方針があって読解教育がされて現場の先生たちが子どもたちの教育をしていくのか、という点を教えてください。

北川：まず一つ確実に言えるのは、アセスメントのために教育をしていることは決してないことです。PISAで高得点をとれたことには、正直なところ、フィンランドは驚いたのです。まさか1位だとは思わなかったと。それはともかくとしまして、教育方針については、話自体は30年前の教育改革までさかのぼります。読解教育を含めた国語教育が、現在のような形になった理由、その目的について、この教科書の著者である、フィンランドの国語では有名な先生が、ある時おっしゃったことをそのまま伝えます。フィンランドはとにかくヨーロッパの中では言語が特殊です。ハンガリーとエストニアとフィンランドだけ、ゲルマン系の言葉でもラテン系の言葉でもない言葉を使っています。また1970年代、教育改革が進んだ頃は東西冷戦のはざま、ソ連とも今の日本とアメリカのような関係を保ちつつ、しかし西側の一国でもありました。そういった非常に微妙な地位にある国がこれから生き残っていくために必要な力は何か、と考えて出た結論が、コミュニケーションの力です。そして、その力をつけるのに一番重要なのが、国語教育であると。それまでは、ドイツ式の国語教育を採用していましたが、フィ

ンランドのように小さな国が生き残っていくのには、ドイツ式の国語教育はどうもうまくいかなかったようです。そこで、世界中の教科書を研究して、世界の中で生き残っていくためのコミュニケーション力を身につけるためには、どういうふうにもソッドやカリキュラムを組んでいけばいいかと考えた結果できたものが、現在のフィンランドの国語教育なのだそうです。1970年代のフィンランドの教育改革は、国語自治会が決めた共通制策に基づくものではありませんが、内容の改革は割と冷戦の終結とか、あるいはフィンランドがEUに加盟した時点を境に大きく変わっていきます。フィンランドが英語教育を小学校3年生から始めたのも、EU加盟がきっかけです。

読解教育では、例えば、歴史的な事実を、文脈はあまり関係なく読んでみる力やコミュニケーション力がトレーニングされていくもの、ととらえていいでしょうか。

北川：はい、先ほどの評価のところ、訓練や暗記で簡単に伸びるものではないと言っている一方で、コミュニケーションを含めて、すべて訓練だと定義しています。何もせずに実際に伸びるものではないということを国語で明確に打ち出しています。例えば、放っておいても子どもは本を読むようにはならない、だから強制的に読ませる、とまで言っています。すべて訓練でやる。ですから論理的に表現する、あるいは物語を自分で書く、といったことも本人が持っている創造性や何かに任せているだけでは、書ける子は書けるが、書けない子は書けない。それでは教育の義務の放棄である、とまで書かれています。

ご自身のご経験をふまえて、ヘルシンキ大学で学ぶ学生と日本人の違いについて、教えてください。

北川：私自身ヘルシンキ大学と大使館勤務を合わせて、1991年から98年までフィンランドに滞在していました。印象から申し上げますとフィンランド人は日本人に非常に似通っていて、肝心なことは言いません。いがみ合いが嫌いで、何よ

りも大切なのは「飲みニケーション」という非常に分かりやすい国民性です。ヨーロッパ人の他の国の人たちに言わせると、フィンランドには、スウェーデン語とフィンランド語2つ公用語があるものの、「2カ国語で黙る」と言われているくらいしゃべりません。フィンランド語にも以心伝心という言葉があるぐらいです。(笑)。社会的にも歴史的にも、もともと森の中の非常に小さいコミュニティの中で発展してきた国ですので、言わないで通じることは言わずに済ませようと思っています。コミュニケーションとはまったく対局にあるようなところなのです。そこに私が日本の教育が参考にすべきだと感じているのは、ダブルスタンダードという観点です。国際的な場に立たされたとき、フィンランド人はまさに普通のヨーロッパ人のように、論旨明快に話します。コミュニケーションが苦手な国民性であることは、本人たちも非常に強く自覚はしていますが、必要なときにはきちんと話せるのです。私がいた当時は91年からですので、教科書検定が廃止される93年より以前の人たちの状態が、そのようだったということもあります。最近2年間ぐらい、再びフィンランドに頻繁に出かけるようになって、フィンランド人の子どもたちと話していると、本質は当時と変わらないと感じます。余計なことはしゃべらない。中学生ぐらいですと、結構恥ずかしそうにしゃべります。活発な感じはしません。素のフィンランド人はむしろ今の日本人

よりも、ちょっと昔の日本人のような感じがします。しかし一方で、新しい教育、古い教育も含めて、いざとなったときのコミュニケーション力、あるいは論理の展開には迫力を感じます。

ニュージーランドとアメリカのメソッドを取り入れる前は、ドイツ式を採用していたとおっしゃいましたが、ドイツ式とはどういう内容なのでしょう。

北川：もう30年前なので具体的に聞かれてもなかなか難しいです。30年前のドイツの教育がどんなものだったか、今はよく分からないのですが、少なくとも今言われていることは、ドイツ式の時代には、例えば班活動はもちろんやりませんし、先生と生徒のコミュニケーションは全く成立していなかったというのです。先生が一方向的に授業して生徒は聞くだけ。特に地方の学校になると、生徒の自由な発言さえ許されないというのが学校の定義であったということです。いまフィンランドは親の世代が学校に自分の子どもを信頼して任せていると公的には言われていますが、実際のアンケート調査では例えば1960～70年代の学校に通っていた大人は、決して学校にいい印象は持っておらず、今の自由な雰囲気を実感できない人が多いのが現実のようです。古い教科書が存在するのでよく見てみれば分かるのかもしれませんが、授業の進め方の違いが大きいということを、フィンランドの教育関係者なども言っています。

参考資料・参考文献

- ・北川達夫&フィンランド・メソッド普及協会訳・編（2006）フィンランド国語教科書（小学3年生）経済界
- ・北川達夫&フィンランド・メソッド普及協会訳・編（2005）フィンランド国語教科書（小学4年生）経済界